

# 戦争における死

暇の炒めもの <http://basel.blog.shinobi.jp/>

課題作文 / 16. Aug. 2009

## 1. 予備考察としての死の定義

自分自身の死を経験することは出来ない、よく言われる。経験する者は同時に、生きている者であるということだ。この関係性を指し表すときに、ジャンケレヴィッチの唱えた「一人称の死」という表現が用いられる。何ごとかを考えている張本人である「自分」が一人称であり、その身近にあって影響を与えるような人たちが二人称、それ以外の疎遠な人々を三人称とし、二人称の死こそが人間に決定的な影響を及ぼすものであることを主張する。つまりある人間にとって死は区分され分類され得るものだという。何故ならば、見知らぬ他人の死など意識されるものではなく、仮に報道や伝聞によって死を知ったとしても、たいした影響ではありえないという。そしてまた、自分自身の死となるとまったく反対の意味で知覚不能である。自分が死んだときには自分が死んでしまっているから、もう何事も経験できない状況が死であるからには、自分の死を経験することはもちろん出来ないという。そうなれば、いまや人間が自分のために経験しうる死は身近なる他人のものでしかあり得ないということになり、それが二人称の死なのである。

だがこの言説の裏には、「他人」の死を経験することは寧ろ当然であり、可能であり、よくあることだという意識がある。ここでまず私が指摘したいのは、他人が死を向かえその肉体の朽ち果てることと、自分自身の死という、人間にとって極めて長きに渡って不可知そのものであり、おそらくこれからもなお思索行為の火種であるだろうもの、これを「経験」の一語によって容易く並列する精神の貧しさである。本論と無関係ながら手短かに批判すると、経験不可能性を主題として死を人称に組み込むならば、自分自身の立場(一人称)を死などに譲るべきではない。明らかに一人称の死という訳出が不手際なのであり、素直に「私の死」とすればよかったのだ。さらにまた、仮に死を人称の関係に引き込むならば、「私の死」は二人称のポジション以外には入りえないはずである。翻訳が不適切なるのみならず、翻訳以前の段階で言葉が錯綜していると言うべきであろうが、原著を読んでいないのでここまでに控える。

今回の考察は全く学術的な報告の体裁を放棄している。よって今はまず、一通り私が死を定義してしまおうと思う。といっても、肉体的な死の定義について脳死論を繰り広げようというのではない。法律理論と人間的な観念の定義を混同することには差し当たり価値がない上に、やはりこれも本論と関係がない。私の考える死とは、「今ここにいる自己を脅かすもの」である。

人間の死を考えるときに、生まれ来たり死に行くという時間軸を持ち出して考えることは実態に即していない。実態とは、人間が現実にとどのような生活を送っているかということではなく、人間が死を考えるときに時間の流れを考察していないということ、時間の流れというのはあくまで後付けの説明概念に過ぎないということである。そもそも、自分以外の死を目撃したときに、その人間が営んできた生活に思いを馳せ、「人生の価値」だとか「人間的な最期」だとかを評価しようとするのは極度の理論武装であって、典型的な人間の感じ方ではないだろう。死を観察した人間にとって、死とはあくまで死であり、宗教的な意味づけは抜きにしても、「終わり」なのである。終わりがあるなら始まりがある、すなわち人間は生まれて死んでいくのだと、そこで人間は初めて認識し得るのである。人生、時間、経験といった発想は死の目撃からこそ語られるのであって、死と同時に呼び起こされ語られうるものではないのだ。また、自己の死を経験できないと簡単に言う

が、大概の場合は誕生の瞬間、およびそれに継続するかなりの期間は記憶の範囲外であり、誕生以前にいたっては論理的にも認識不能の世界である。よって人間は、今ここに自分が生きていることは了解しているとしても、その前後に何かが存在するとは思得ないはずでありながら、他人の生と死、他人の始まりと終わりを見ることによって、自分にも始まりと終わりがあること、今ここにいる自分が危ういものであることを意識するようになるのである。この点において、死の持つ意義が「私を脅かすもの」としてのみ定義されるのだ。現実には肉体が減り行くこと、また他者が死んでしまうようなことは、個々の特性としては何の意味でもありえず、この脅威をさまざまな側面から観測しようとした結果に過ぎないと、ここでは考えておく。

## 1. 戦争における計画・偶発の二面性

近代国家に限らず、戦争の遂行には2つの側面を認めるべきである。まず一方には、軍勢として戦闘に参加することが不可避であり、予想されており、そのための準備を入念に進める計画性がある。他方で、戦闘の発生・経過や結果の予想が難しく、いつどこで戦闘に参加するのか、激戦であるのか、待ち受けるのが敗北であるか戦利品であるかという偶発性がある。これはすなわち、計画という面においては戦争を予期し待ち受ける国政や、構成員に戦争の必然性と大儀を前もって周知させる能力、偶発性という面においては戦争の発生と経過を掌に予期し実地に把握する統制が、それぞれ重要性を帯びることになる。このような二面性は戦闘に参加する個人においても変わらない。戦闘員は戦争を予知しさまざまな準備をすることが出来ようし、その一方で具体的にどのように戦争に関わることになるか完璧に見通すことは出来ない。そうした曖昧な形で「戦争に関わること」は予期されるのだけれども、しかし、戦死するかどうかという点に関しては多くの場合、少なくとも戦闘に参加するまで十分な期間がある時には全く偶然性の霧の中に包み込まれている。戦死の可能性があることは勿論だが、出征の確実性とは比べ物にならない。

ただしこれはあくまで、戦争に参加することが決定した立場の人間にとっての話である。戦争を全く予期せず、恐れもせず、その実態を知らないものにとっては、戦場も戦死も遠い。そこから戦場に赴くことが確実となると、まず戦場が計画性の中に組み込まれてくるというだけである。だからこそ、戦場と戦死が同時に計画性を帯びることも当然にあり得る。一桜花を知らない日本人があらうか。結局のところ、人間の意識に含まれるのは当面の出来事、それも現在とのつながりを持っていると見なされる場合だけであって、諸兵士にとっても戦争が計画的な側面を持っていると表現するとしても、それが意味するところはせいぜい先の見通しを持つことも出来るという程度のことでしかあり得ず、しかもその内容には常に揺らぎがある。この揺らぎは先述した戦争そのものが軍勢に対して持つ偶然性に基づくものであり、それを計画性に摂取することが出来るのは政府、重鎮、宰相、将軍および敵国のみであり、兵士ではない。

## 2. 戦争と戦闘

運籌策帷幄中、決勝千里外。籌(はかりごと)を帷幄の中に運らし勝を千里の外に決す。

智謀の極みは戦闘の指揮官ではなく、戦争の推移を見通す策士にこそある。見通しのきかない戦争のみならず、戦術・戦闘までも計画性を付与し思考するのである。このように戦争と戦闘の形を考えると、私はこの言葉とともにまた一つ、孫子の教えに考えをめぐらす。

勝久則鈍兵挫鋭、攻城則力屈、久暴師則國用不足、夫鈍兵挫鋭、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而起、雖有智者、不能善其後矣、故兵聞拙速、未睹巧之久而也。久しければすなわち兵を鈍(つか)らせ鋭を挫く。城を攻むればすなわち力屈き、久しく師を暴さばすなわち国用足らず。それ兵を鈍らせ鋭を挫き、力を屈し貨を殫(つ)くすときは、すなわち諸侯その弊に乗じて起こる。智者ありといえども、そのあとを善くすることあたわず。ゆえに兵は拙速なるを聞くも、いまだ巧の久しきを睹(み)ざるなり。

戦争と戦闘は不可分であるし、ある場合にはそもそも区別が出来ないこともある。だが端的に言えば、孫子が危惧するのは戦闘に「金がかかる」ということであり、国家にとってその負担の尋常でないことである。ゆえに彼はそのような負担は我の負うべきものではなく、むしろ策略によってそれを敵勢に負担させてかの国力を殺ぐようにと説く。拙速とは戦闘を(そしてその偶発性と負担を)なるべく早期に切り上げることである。そのような事実によって戦争を終結させ得る計画性なしに戦争を遂行し勝利の実を得ることは不可能である。

例えばこのように、戦争を指導する側にとって、戦争と戦闘は一つの連環をなす出来事であり、区分できるような類のものではない。あくまで便宜的な名称だとすら言えるかも知れない。だが、一兵卒たる人間、戦場に赴く人間にとって、戦争と戦闘の乖離は大きい。彼がまず思い描くのは戦場であるとしても、その行く手にあるのは「戦争」、戦闘と関わりを持つ日々には過ぎないのだ。戦争が始まれば戦闘参加を想定するようになり、戦闘が始まれば戦死を予感するものが大多数であろう。死は、戦死という形を伴って予想圏内に登場するとは言っても、常に戦争に同行しているのではない。あくまで個々の人間にとっては、戦争の進展と情勢評価によってのみ死が思いやられるのである。つまり戦死の危惧は主観的な予測であり、戦死の可能性というものは(たとえ統計的に算出可能としても)あまり定まった値として意識されるものではない。

### 3. 遠い戦場、遠い戦死者

戦争と戦争は連環である。このような見方は戦争の主体を集合体に認める時だけ可能になる。全体のうち、左翼陣地だけが、騎兵旅団だけが、航空師団だけあるいは派遣軍だけが戦闘に参加することは出来る。だが一人の人間の上半身だけが、手だけが、意識だけが戦闘に参加することは出来ない。それゆえ、戦闘は自分が参加しているか否か、ただこの一点でのみ思考され得るのである。銃後にとって戦場が遠かったのはそこで戦闘が行われ得なかったからであるが、兵卒にとって戦闘が遠いのはそこが戦場ではないからである。ひとたび戦闘をゼロ距離で経験したものは、そもそも戦闘までの距離を思考することはない。戦闘に対して距離を認めうるのは、戦闘に参加することを前提していない人間だけであり、戦闘に参加する人間にとっては、戦闘とは参加しているか否かである。

戦場が遠い、という言葉が意味するのは、これから自身が踏み込む戦場までの距離ではなく、今この時に戦友が参加している戦場との距離である。他人の戦場までの距離は、そこに参加していない者にとって、どの位置まで近づいても短縮できるものではない。距離を減らすためには結局、自分自身も戦場に赴かねばならないのだ。自身が経験していない限り全く隔絶されるという意味で、戦場は常に遠いものなのである。

そして戦場においては死の特殊な形態として戦死がある。

### 4. 戦死の予感と認識

戦争と戦争は連環である。このような見方は戦争の主体を集合体に認める時だけ可能になる。全体のうち、左翼陣地だけが、騎兵旅団だけが、航空師団だけあるいは派

遣軍だけが戦闘に参加することは出来る。だが一人の人間の上半身だけが、手だけが、意識だけが戦闘に参加することは出来ない。それゆえ、戦闘は自分が参加しているか否か、ただこの一点でのみ思考され得るのである。銃後にとって戦場が遠かったのはそこで戦闘が行われ得なかったからであるが、兵卒にとって戦闘が遠いのはそこが戦場ではないからである。ひとたび戦闘をゼロ距離で経験したものは、そもそも戦闘までの距離を思考することはない。戦闘に対して距離を認めうるのは、戦闘に参加することを前提していない人間だけであり、戦闘に参加する人間にとっては、戦闘とは参加しているか否かである。

戦場が遠い、という言葉が意味するのは、これから自身が踏み込む戦場までの距離ではなく、今この時に戦友が参加している戦場との距離である。他人の戦場までの距離は、そこに参加していない者にとって、どの位置まで近づいても短縮できるものではない。距離を減らすためには結局、自分自身も戦場に赴かねばならないのだ。自身が経験していない限り全く隔絶されるという意味で、戦場は常に遠いものなのである。そして戦場においては死の特殊な形態として戦死がある。

戦死を認識することには多重性がある。それは戦死者を見るということが、肉体的に他者の死を確認するのみならず、自己の身の危ういことを認めることになるからである。戦死という言葉には、戦場でしか通用しないのであろうニュアンスをこめることが出来る。事後的に報告を受ける人間もこれを戦死と呼ぶのだが、その時には戦死はほとんど死そのものでしか無い。それは、生か死かの二分で考えることが戦闘の外では許容されているからである。戦闘の最中、手傷を負い肉体の果て行くときには、生と死の二つがあることは確実だとしても、そのどちらかに明確に属しているとは言えない。そのように境界の曖昧であることを人間が目撃するとき、何が起こるのか知りたいとも思えないが、あえて考えてみれば焦燥か落ち着きかのいずれかではないだろうか。共有してきた死の観念が揺らいだと捉えるか、目前の現実をあえて生と死の二分によって認識しなおすかによって、戦死に接した際の感情は違ってくるであろう。ともあれ、死を理論立てて共有し安定させるだけの余裕が戦場に無いことは確実である。

## 5. 戦争における死

戦争と戦闘は厳密な線で区分できるものではないのに、一個人のためにこれを区分するならば、必然的に定義行為それ自体に、その言葉遣いに、曖昧さが付きまとうことになる。総体において区分に意味があるとしても、それがそのまま一人の人間に当てはまるとは言えないのである。軍勢は個人によって構成されているが、個人個人の経験し定位した「戦闘」を寄せ集め語っても、戦争と戦闘の観念には結びつかない。端から異なった視点においてのみ、人間は戦争と戦闘を語る事が出来るのである。

戦争における死そのものは、戦死ではない。戦死には、死の観念が持つ圧倒力も時間的特性も与えられない。戦死というものは、世代、時間、老いや人間などを想起する基点になし得るような、強力な孤立性と時間性を持たず、対立項を持たず、あいまいであり続ける。人間の肉体が滅び行く時には本来いつでもそうなのであるが、とりわけ戦闘において明らかになる自明の関係がある。すなわち、生と死は個々の事例において時間の経過に沿って明確に区分が出来るものではないこと、これらは二つの端ではあるが領域ではないということ。そしてまた、死においては、他人の事実を他人と共有出来ることで時間において力を得る一方で、戦死においては共有より手前の認識の段階で力を得、時間性なしにその場において、自分に起こった現象として、単体として影響を及ぼす。それゆえ、戦死者はしかるべき時に死ぬのである。